

# 森林防疫ニュース

VOL. 6  
No. 10  
(No. 67)

編集 林野庁 森林保護室

発行 全国森林病虫獣害防除協会

1957.10. 1

## 林力の向上と防疫

田中紀夫

さきごろ農林省から、所謂農林白書に続いて、新農林政策が発表されたが、早くも、新聞に、雑誌に、いろいろ批判が出ている。懐疑的な批判は、日本をめぐる国々の農産物過剰と農業人口の過剰を背景とする農業政策をあまりに農業部内だけで考え過ぎるという。つまり食糧の自給度向上や農村人口の圧迫緩和のため更に拡大せんとする開拓の経済性に対する疑問や、現在も過剰である牛乳生産を強力な酪農奨励によつて、5年後には倍増せんとするが、需要のテムボが追付かぬ見通しを如何に考えてゆくかなどが懸念されている。

ところで林野関係は、“森林資源の開発育成”という項目に10行足らずの説明で、農にくらべあまりに簡単で、具体性に欠け、批判の限りでないようだが、要は治山と広義の木材需給対策を根幹としている。

けだし、森林蓄積や木材需給の政府数字に兎角の批判があるにしても、現実の木材需給が年と共に窮屈になり、弾力を失っていることは否定できない。割安でないソ連材の輸入が熱心に行われ、今年の60万石が来年は150万石要望されているなどはその証左であろう。

つまり木材の場合には、凡そ農産物のような過剰懸念なく、生産の増強に邁進できる背景にあり、その増産手段の本命は、奥地開発と、未立木地ならびに低生産能率の天然林について人工造林を拡大することである。

ところでこの森林の生産性向上について反射的に私の念頭に浮ぶものは北海道の天然林である。

昭和27年と記憶するが、帯広営林局陸別のエゾ、トドの天然林で、菌害木に対処するために、北大の亀井博士にお願いして、林内講習が開かれたことがある。趣旨は菌害木の材質がカステラ状になつていて、進行のひどいものはパルプにも使い物にならないので、菌害の早期発見と防除のための講習だつたが、おどろいたことに実習地は一見町当千5、6百石見当の立派な林分だが半分は菌害をうけていた。

後に層雲峡の中樞の美林についてただすとほぼ同様のことだつた。従つて、菌害防除が北海道の天然林について喫緊の事項であり、総体に過熟の林相を若返らす努力と、むしろ人工造林への転換が痛感されたものだつた。幸に、今や1千百万町に人工造林を拡大する計画が打出され、推進されんとする気運は慶賀にたえない。しかし、欧州でも苦い体験済みである人工一斉林の病虫害に対する抵抗力の弱さを考えると防疫の組織的強化を今から並行的に考慮する必要がある。先年の北海道の8千万石という世紀の大風害木の後が、昔の樺太と比較され病虫害の発生を非常に懸念されたが、防疫に周到な注意を以て処理されて、大過なかつたことは防疫技術の成功だつたことを忘れてはなるまいと思う。

(森林資源総合対策協議会常務理事)

### 目次

巻頭言.....	田中 紀夫.. 1	ハジマクチバの防除例.....	斎藤 諦..13
情報.....	..... 2	椎茸増木の穿孔虫と対策.....	中野 博正..14
解説		犀峽地区に入つたクリタマバチ	
エゾマツ苗雪腐病の病原菌について..	伊藤 一雄.. 8	防除の記.....	小林 健登..15
観察		雑 録.....	.....18
誘蛾灯の周辺にネキリムシはどの			
ように増加するか.....	余語 昌資..11		

## 情 報

◇ 被害速報  
病 害

## ○ タケの開花病

京 都 乙訓郡大原野村の1～6年生マダケ林に発生、7月19日発見。被害面積25町、被害本数250,000本、被害材積25,000束。(府・樋本金雄 7. 22)

## ○ タケの開花病

## ○ タケの藁自然枯病(天狗巢病)

京 都 前記開花病の被害地中、面積10町、本数100,000本、が併発地域となつている。(府・樋本金雄 7. 22)

## ○ 針葉樹稚病立枯病

福 島 安達郡二本松町大字渋川のアカマツ播種床に発生、7月20日発見。被害面積2反5畝、被害本数約20,000本。同町大字永田字万作では8月7日発見。被害面積5畝、被害本数約10,000本。5月中旬から梅雨明けにかけて激害となつた。ウスプルンを散布して防除した。

(福島林駐二本松分室・菊地技師 8. 15)

## ○ スギの赤枯病

大 分 日田郡前津江町大字大野の3年生スギ(さし)造林地に発生、8月2日発見。被害面積1反、被害本数300本、幹が侵され、全林枯死している。

(県・長野愛人 Sp. 8. 12)

## ○ 枝枯菌核病

秋 田 秋田局阿仁署阿仁経営区73林班ち、る、に(北秋田郡阿仁町大字岩ノ目沢)12～25年生スギ人工林に発生、7月24日発見。被害面積5町、被害本数6,000本、6月下旬より変色しはじめて、現在では判然と色別ができてきている。周辺の大又川流域民有林でも20～30年生のスギに被害あり、被害面積約10町、被害本数約10,000本。

(局・伊藤二郎 8. 13)

新 潟 新発田市赤谷及び滝谷の7～50年生スギ人工林に発生、6月30日発見。被害面積40町。年々被害が増大する。(県 7. 23)

大 分 東国東郡安岐町大字朝来の10年生スギ人工林に発生、8月8日発見。被害面積5反、被害本数1,500本、被害材積15石。植栽後3～4年目から緑枝が褐変し、樹全体が枯死してゆくものもある。現在、全林に及び回復の見込がない。(県・長野愛人 Sp. 8. 12)

## ○ スギの黒痣枝枯病(林試樹病研究室同定)

大 分 玖珠郡九重町大字田野の25年生スギ(さし)人工林に発生、8月18日発見。被害面積5町。被害本数13,000本。尾根筋より下方にまん延の徴があり、枝に赤褐色病斑がある。枯死したものは100本内外である。

(県・長野愛人 Sp. 8. 20)

## ○ マツの葉さび病

福 島 安積郡熱海町大字石筵字嶽山の5年生アカマツ天然林に発生、5月25日発見。被害面積5反。県行造林地としてカラマツを植栽したなかに点在するものである。(県 7. 24)

## ○ カラマツ胴枯病

長 野 南佐久郡川上村居倉字高町の6年生カラマツ人工林に発生、7月19日発見。被害面積13町、被害本数150本。(川上村駐在・上村武夫 Ag. 8. 13)

## ○ カラマツ落葉病症状

大 分 玖珠郡九重町日野の30年生カラマツ人工林に発生、8月18日発見。被害面積1反、被害本数200本、被害材積50石。葉に赤褐色病斑を生じ、落葉する。その後新芽を出さず枯死するものが多い。林試樹病研究室へ送付したものは、落葉病の病原菌は発見されなかつた。(県・長野愛人 Sp. 8. 20)

## ○ ヒノキの根ぐされ病

京 都 舞鶴市でヒノキ1回刈替苗に発生、8月4日発見。被害面積2畝、被害本数20,000本。

(府・樋本金雄  
舞鶴事務局・赤野 暁 8. 6)

## ○ ヒノキ葉ふるい病(推定)

大 分 東国東郡国見町大字岐部の25年生ヒノキ人工林に発生、8月8日発見。被害面積5畝、被害本数30本。梢頭を残して落葉している。そのうち数本はスギカミキリのため枯死している。(県・長野愛人 Sp. 8. 12)

## 虫 害

## ○ カラマツオオアブラムシ

北海道 北見局網走署杵端辺経営区8林班り、9林班は、11林班ろ(網走郡美幌町)で2～3年生カラマツの人造林地に発生、8月6日発見。被害面積57町。被害地域にリンデンBHC乳剤を散布した。(局 8. 30)

## ○ スギクロホシカイガラムシ

大 分 日田市大字有田字北向の8年生スギ人工林に発生、最初の発見は昭和31年5月20日で極少量にとどまっていたが、本年は増大した。被害面積6反。北面傾斜地の上部、林冠上層の新葉に多く穂木の採取に支障を生じている。(県 8. 6)

## ○ スギノマルカイガラムシ

大 分 竹田市大字小塚字原山のスギ造林地で点状に発生、7月30日発見。被害面積1畝。(県 8. 13)

## ○ キマダラコウモリ

大 分 竹田市大字小塚字原山の3年生スギ造林地に発生、7月30日発見。被害面積20町。(県 8. 13)  
東国東郡大字朝来の3年生スギ造林地に発生、8月8日発見。被害面積5反、被害本数100本。

(県・長野愛人 Sp. 8. 12)

## ○ コウモリガ

青 森 青森局増川署増川経営区69林班ろ(東津軽郡三厩村大字増川)の3～6年生スギ人工林に発生、7月24

## 森林防疫 ニ ュ ー ス

日発見。被害面積18町，被害本数137本。被害木は点状にしている。(増川署・上遠野 博 8.9)

## ○ コウモリガ科の1種

島根 八東郡東出雲町今宮の4年生ヒノキ造林地に発生，7月12日発見。被害面積8反。(県 8.8)

## ○ スギノメムシ

大分 竹田市大字戸上字裏の谷の3年生スギ造林地に発生，8月1日発見。被害面積3反。(県 8.13)

東国東郡国東町大字小栗の5年生スギ造林地に発生，8月8日発見。被害面積3反，被害本数900本。

(県・長野愛人 Sp. 8.12)

## ○ スギノメムシ

## ○ スギノハダニ

新潟 中魚沼郡津南町大字赤沢のスギ幼令人工林に発生，7月12日発見。被害面積10町。

十日町市六箇大平地内の10～35年生スギ人工林に発生，6月24日発見。被害面積100町。(県 7.24)

北魚沼郡湯ノ谷村折立又新田県行造林地の22年生スギ人工林に発生，7月22日発見。被害面積3町5反。

(県 8.7)

## ○ ハイイロアミメハマキ(推定)

埼玉 児玉郡神泉村大字矢納の33年生カラマツ人工林に発生，7月17日発見。被害面積25町，被害本数35,000本，被害材積20,000石。林冠が帯褐色となり，林床には虫糞が大量に見られる。

(寄居林業事・佐野広次 設楽源蔵 8.2)

## ○ トドマツオオアブラムシ

## ○ ハイイロアミメハマキ

北海道 帯広局白糠署白糠経営区69林班ろ(白糠郡白糠町庶路)の5年生カラマツ，トドマツ人工造林地に発生，7月1日発見。被害面積4町，被害本数8,000本。

(局 8.12)

## ○ マツツマアカハマキ

鹿児島 熊毛郡中種子町大字西ノ表町，南種子町一円の2～10年生クロマツ人工林及び天然林に発生，6月10日発見。被害面積100町，被害本数約300,000本。3年生以下のものに枯死が多い。マツノコマダラメイガ，マツカレハも併発している。

## ○ ミノガ科の1種

福島 石城郡三和村大字下市萱字辻の4年生スギ造林地に発生，6月3日発見。被害面積3反。

(県 7.24)

## ○ マツカレハ

福島 内郷市内の神社境内と墓地に集団する15～45年生アカマツに発生，6月15日発見。被害面積約1町，被害材積750石。(県 7.24)

安積郡三穂田村大字山口の穂積中学校林の7年生アカマツ造林地に発生，8月14日発見。被害面積3反，被害本

数12,000本。(県・佐々木 寛 8.19)

(郡山林駐・藤田 昌一)

茨城 東京局笠間署笠間経営区61林班よ，か，ち，ろ(芳賀郡益子町大字益子字高館)の6～15年生アカマツ天然林に発生，6月中旬発見。被害面積3町。BHC粉剤を散布した。(局 7.27)

新潟 西蒲原郡巻町松の尾，角田の20～35年生アカマツ，クロマツ人工林に発生，6月15日発見。被害面積30町。同郡赤塚村では同じく5町の被害があつた。1部薬剤散布を実施した。(県 7.23)

佐渡郡両津市大字吾湯，青山地内の13年生アカマツ天然林に発生，5月中発見。被害面積激害3町，中害2町，微害5町。(県 8.19)

長野 駒ヶ根市中沢の10年生アカマツ天然林に発生，7月3日発見。被害面積3町。

岡谷市の旧市域周辺の8～15年生アカマツ天然林に発生，5月20日発見。被害面積45町。(県 7.30)

下伊那郡松川町大字大島字西山の5～8年生アカマツ天然林に発生，7月10日発見。被害面積1町5反，被害本数4,000本。

県下被害累計面積108町3反1畝，本数297,825本。

(県 8.3)

愛知 西加茂郡小原村大字東市野々のアカマツ，クロマツ林約20町に発生していたが，現在黄蘗菌の発生が著しい。7月30日発見。

(県挙母事・塩谷 勝 8.24)

同郡箕投町，藤岡村の20～30年生アカマツ，クロマツ天然林約100町でも被害甚大であつたが，黄蘗菌の発生著しい。(県挙母事・安藤忠通 8.24)

奈良 宇智郡牧野村大字釜窪の5～20年生アカマツ，クロマツ林に発生，6月10日発見。春から予察調査をしている。(県・村田武彦 7.24)

岡山 勝田郡勝北町山形の7～9年生アカマツ天然林に発生，6月19日発見。被害面積3町。7月上旬BHC剤を散布した。(県 8.9)

徳島 坂野郡上板町大字大山の15年生クロマツ林に発生，7月9日発見。被害面積50町，被害本数150,000本。中10町は激害である。(県・中野 子 7.23)

愛媛 大洲市野佐来町の8年生マツ天然林に発生，3月20日発見，被害面積10町，被害本数40,000本。周桑市小松町新屋敷の45年生マツ天然林に発生。被害面積激害3町，中害5町，微害200町。(県 7.27)

## ○ マイマイガ

長野 北佐久郡御代田町字一の沢の7年生カラマツ人工林に発生，7月4日発見。被害面積3反。

(県 7.30)

## ○ ハジマクチバ

新潟 佐渡島両津市大字小松字玉崎地内のタケ人工林に発生，7月25日発見。筍の約2/3を枯死させている。

## 森 林 防 二 疫 ユ ー ス

毎年若干の被害があるも本年は特に甚だしい。

(県 8. 19)

### ○ アカシジミの幼虫

**栃 木** 前橋局大間々署足尾経営区63林班は(上都賀郡足尾町大字湖南)の10~20年生ナラ天然林に発生, 6月25日発見。被害面積30町, 被害本数2,000本。被害木は葉がなくなるほど食われ, 幼虫が瘤状に群生している。

(大間々署・鈴木善秋 7. 24)

### ○ スギハムシ

**三 重** 一志郡久居町大字稲葉字西山の3年生クロマツ造林地に発生, 7月13日発見。被害面積2町9反1畝。阿山郡葛ヶ原村字桂谷本州製紙株式会社社有林の1~5年生クロマツ造林地に発生, 7月15日発見。被害面積1町2反。鈴鹿郡三宅町奈良ノ木の3年生クロマツ造林地に発生, 7月上旬発見。被害面積6反。(県 7. 31)

一志郡白山町大字佐田字城ヶ谷の6年生アカマツ, クロマツ造林地に発生, 7月24日発見。被害面積1町。津市片田町の4~5年生クロマツ造林地に発生, 7月25日発見。被害面積13町。安芸郡美里村大字穴倉, 家所の3~4年生スギ, クロマツの造林地に発生, 8月1日発見。被害面積15町。特にスギの被害が甚だしい。燻煙剤で駆除をした。

安芸郡安濃村草生, 村主の3~4年生クロマツ, スギの3~4年生造林地に発生, 8月1日発見。被害面積10町。美里村以外はBHC粉剤を散布して駆除した。

(県 8. 14)

**京 都** 相楽郡木津町大字梅谷, 加茂町東小の5~30年生アカマツ林に発生, 8月8日発見。被害面積10町, 被害本数100,000本, 被害材積700石。尾根筋はほとんど被害を受けている。

(府 梶本金雄  
木津事務所・田村技師 8. 12)

**兵 庫** 加東郡東条町少分谷の3年生アカマツ造林地に発生, 7月4日発見。被害面積1町。小野市櫻山町礪の7年生アカマツ天然林に発生, 7月20日発見。被害面積3町。(加東農林出張所・平山 旬 8. 3)

**和歌山** 有田郡金屋町西ヶ峯字楠谷と能蔵の3年生スギ, ヒノキ造林地およびアカマツに被害発生, 7月上旬発見。被害面積約5町激害。なお, 金屋町上六川にも発生, 目下調査中である。(県 8. 16)

**鳥 取** 八頭郡若桜町大字赤松地内3~5年生スギ造林地に発生, 6月20日発見。被害面積2町。(県 7. 23)

**鳥 根** 下記各地の昭和30~31年度植栽アカマツ, クロマツ造林地を主として天然林にも発生, 7月15日発見。鳥取県にも被害がある見込であるが, その被害面積は, 能義郡布部村30町, 広瀬町10町, 伯太町13町, 仁多郡仁多町30町, 簸川郡多岐村20町。BHC粉剤を散布した。

(日本パルプ米子工場山林部・谷尾 昂 7. 19)

能義郡布部町大字宇波外の2~30年生アカマツ林に発生, 7月16日発見。被害面積60町, 被害本数180,000本,

被害材積60石。内30町についてはBHC71~2%粉剤を散布した。(県・吉岡美城 7. 31)

能義郡布部町下布部, 宇波他の2~3年生造林地30年生天然林のアカマツに発生, 7月16日発見。被害面積40町。

(一部は上記日本パルプ所有造林地)。仁多郡仁多町佐伯(大原山)の3年生アカマツ県行パルプ造林地に発生, 7月12日発見。被害面積33町3反6畝。昭和31年度から発生。BHC71%粉剤町当約22kg散布した。

(県 8. 8)

**愛 媛** 越智郡菊間町中川字大瀬の3年生マツ造林地に発生, 7月20日発見。被害面積1町。大洲市菅田富士山の4~7年生マツ天然林, 人工林に発生, 7月15日発見。被害面積2町, 枯損本数5,000本, 生育阻害されたもの5,000本。(県 7. 27)

**福 岡** 熊本局直方署勾金官行造林地(田川郡香春町勾金)の7年生スギ, ヒノキ, マツの造林地に発生。30年8月上旬10町に発見。BHC73%粉剤を散布。31年7月20日再発, 被害面積5町, BHC71%粉剤54kg散布している。(署・柴田徳光 8. 23)

**大 分** 佐伯市木立字岡の木立中学校校林8年生マツ人工林に発生, 7月12日発見。被害面積5町, 被害本数1,400本。臼杵市大字大浜の5年生マツ一斉林に発生, 7月11日発見。被害面積3反。同市大字佐志生の5年生スギ, 5~40年生マツに発生, 7月11日発見。被害面積スギ6反, マツ3町6反。(県 7. 27)

大野郡一円の3~7年生スギ, ヒノキ, マツ人工林に発生, 6月25日発見。被害面積激害800町, 中害300町, 微害200町。(県 8. 3)

玖珠郡九重町一円のスギ, アカマツ, クロマツ, ヒノキの幼令林に発生, 7月15日発見。被害面積500町。

(37森林区駐在・佐藤公介 8. 7)

臼杵市家野の4~13年生スギ, クロマツに発生, 8月2日発見。被害面積1町。同市佐志生の4~35年生スギ, クロマツに発生, 7月12日発見。被害面積2町。両地域共に1反内外の激害地を中心として微害地がとりまいている。(臼杵農林事務所・河野 登 8. 7)

南海部郡宇目村字上津, 小野, 釘戸, 田代の5~30年生スギ人工林に発生, 被害面積激害5町, 中害3町, 微害2町。30年度に発生した形跡があつた。(県 8. 13)

### ○ ハンノキハムシ

**奈 良** 山辺郡都祁町の2~3年生ハンノキ, ヤマハンノキ造林地に発生, 7月20日発見。被害面積3反, 被害本数2,000本。(県 村田武彦  
都祁村森林組合・井岡主事 7. 24)

### ○ スギカミキリ

**新 潟** 新発田市大字上赤谷字榎木平の45年生スギ人工林に発生, 7月5日発見。被害は散発的で新梢から3尺位下部に幼虫がいて, 上部は枯損する。被害面積2町。

(県 7. 23)

## 森林防疫 ニ ュ ー ス

## ○ マツキボシゾウムシ

秋田 秋田局本荘署本荘経営区60~63林班(由利郡仁賀保町大字冬師山)の昭和28~30年に植栽と人工下種を実施したアカマツ造林地に発生, 5月30日発見。被害面積35町5反, 被害本数118,000本。被害木の掘取と焼却を実施した。(局・伊藤二郎 8.18)

## ○ キイロコキクイムシ

岩手 青森局久慈署久慈経営区104, 34の各林班(久慈市山根町)のアカマツ幼令林の樹高2~3m, 胸高2~3cmの樹に発生, 7月14日発見。被害本数8本。伐倒剥皮焼却した。(署・佐藤一男 8.7)

## ○ スギノコキクイムシ

長野 下水内郡栄村大字秋山一帯の20~30年生スギ人工林に発生, 5月上旬発見。被害面積激害50町, 中害100町, 微害250町。被害現地は新潟県境にあり, 人工林2,000町, 多雪地であるが成長は良好。ヒバノキクイムシ, スギカミキリの食害を受けている林分もある。(県 7.16)

## ○ ヤツバキクイムシ

北海道 帯広局陸別署斗満経営区31林班は, 32林班ろ(足寄郡陸別町字上敷弥別)の天然林エゾマツに発生, 7月25日発見。被害面積1町5反, 被害本数50本, 被害材積400石。(局 8.12)

北見局遠軽署野上経営区85林班に(紋別郡湧別町字西芭露)の昭和4年植栽のドイツトウヒ人工林に発生, 8月10日発見。被害面積5反, 被害本数23本, 被害材積5石。被害木は伐倒剥皮焼却した。(局 8.27)

## ○ トドマツキクイムシ

## ○ ヤツバキクイムシ

北海道 帯広局新得署十勝川経営区107~113林班(十勝上川郡新得町字チカベツ)の天然林トドマツ, エゾマツに発生, 5月6日発見。被害面積52町, 被害材積6,000石。上士幌署音更経営区167林班ろ, 172林班ろ, 191林班ろ, 192林班い, ろ, 195林班ろ, はの天然林トドマツ, エゾマツ, アカエゾマツに発生, 6月11~23日発見。被害面積41町5反, 被害材積4,722石。白糠署白糠経営区134林班い, 135林班い, 136林班い, 140林班い, 141林班い, (白糠郡白糠町字コイカナシヨロ)の天然林のトドマツ, エゾマツに発生, 6月中旬発見。被害面積64町5反, 被害材積1,400石。(局 7.22)

帯広局本別署美利別経営区75, 77, 78各林班(足寄郡足寄町字ボンビリベツ沢)の天然林トドマツ, エゾマツに発生, 6月30日発見。被害面積250町。上士幌署音更経営区303は, 31い, 32い, ろ, 173い, 174い(河東郡上士幌町音更川本流)の天然林トドマツ, エゾマツに発生, 7月15~20日発見。被害本数41町8反。被害は共に15号台風の風倒木を原因として発生したものと思われる。(局 8.12)

## ○ トウヒノコキクイムシ(推定)

## ○ モミノコキクイムシ(推定)

北海道 帯広局弟子屈署摩周経営区26林班に, 28林班に(川上郡弟子屈町美留和)の26年生ドイツトウヒ, トドマツ人工林に発生, 6月4日発見。被害面積3町, 被害本数6,000本。

編者註 No.65, P168にアカエゾキクイムシとして掲載(本数60,000本は6,000本の誤につき訂正する)してある。(局 7.22)

## ○ ヒラタキクイムシ(又はナラヒラタキクイムシ)

福島 田村郡中田村立海老小学校のラワン材窓枠に発生, 6月15日発見。二硫化炭素で駆除した。

(材務駐在三春分室・簡野敏夫 8.18)

## ○ オオスジコガネ

福島 遠敷郡名川座村の5~15年生スギに発生, 7月28日発見。被害面積20町, 被害本数2,500本。小浜市の5~15年生スギに発生, 7月26日発見。被害面積180町。被害本数18,000本。大飯郡大飯町の5~15年生スギに発生, 7月26日発見。被害面積100町, 被害本数12,000本。(県 8.2)

長野 南佐久郡佐久町大字海瀬字白矢の6~35年生カラマツ人工林に発生, 8月9日発見。被害面積官行造林地30町, 町有林31町, 国有林30町。

(南佐久郡八千穂村駐在・中島作男 Ag 8.9)

鳥取 西伯郡大山町豊房の6年生アカマツ人工林に発生, 7月21日発見。被害面積20町。同町飯戸で5~6年生クロマツ, アカマツ, カラマツの天然林, 人工林に発生, 7月22日発見。被害面積40町。(県 8.2)

同町豊房字清水原の5~20年生アカマツ天然林, 人工林に発生, 7月31日発見。被害面積80町。同町飯戸字大野地内の4~5年生アカマツ人工林に発生, 7月31日発見。被害面積30町。以上の被害に対しては, BHC, DDT, 燻煙剤等により駆除を実施した。

日野郡江府町大字洲河崎地内の15年生スギ人工林に発生, 7月24日発見。被害面積2反。以上各地では本年はじめて被害を受けた。(県 8.8)

島根 大原郡大東町上久野の7~9年生カラマツ, スギ, アカマツ人工林に発生, 8月1日発見。被害面積25町。飯石郡吉田村菅谷の5年生スギ, アカマツ人工林, 天然林に発生, 8月2日発見。被害面積30町。(県 8.8)

## ○ スジコガネ

新潟 中頸城郡妙高高原村笹ヶ峰の15~22年生ドイツトウヒ, カラマツ, スギ県行造林地に発生, 8月5日発見。被害面積95町。(県 8.12)

愛知 西加茂郡猿投町大字西広瀬の17年生スギ人工林に発生, 7月12日発見。被害面積100坪。

(県拳母事・安藤忠通 8.2)

西加茂郡小原村大字東市野の20年生スギ人工林に発生, 7月30日発見。被害面積3町。

(県拳母事・塩谷 勝 8.22)

## 森林防疫ニュース

兵庫 大阪局山崎署山崎経営区(宍粟郡千種村西河内)の5~8年生スギ, ヒノキ, マツに発生, 8月10日発見。被害面積250町。(山崎署・河毛周夫 8. 24)

鳥取 西伯郡中山町大字羽田井の4~20年生アカマツ, クロマツ, ヒノキ, スギの天然林, 人工林に発生, 8月1日発見。被害面積25町。東伯郡東伯町旧古布庄村の3~15年生アカマツ, スギ, ヒノキ, カラマツ人工林に発生, 7月24日発見。被害面積28町。関金町大字小泉の5~30年生アカマツ, スギ, ヒノキ天然林, 人工林に発生, 8月1日発見。被害面積8町。その他東伯郡, 西伯郡各地で被害がある。(県 8. 17)

島根 大原郡大東町大字上久野字高橋の7~9年生スギ, アカマツ, カラマツ人工林に発生, 8月1日発見。被害面積25町。(県・吉岡美城 8. 6)

徳島 海部郡海南町大字浅川, 那賀郡木頭町大字北川の5~20年生スギ人工林に発生, 7月17日発見。被害面積100町, 被害本数10,000本。(県・中野子 7. 23)

長崎 壱岐郡勝本町百合畑の35年生スギ人工林に発生, 7月20日発見。被害面積1畝, 被害本数10本。

(県 8. 3)

大分 臼杵市大字佐志生の7年生スギ人工林に発生, 7月11日発見。被害面積3反。(県 8. 3)

○ オオスジコガネ

○ スジコガネ

大分 直入郡久住町一円, 直入町の一部のスギ幼壮令人工林に発生, 7月22日発見。被害面積激害200町, 中害400町, 微害400町。(県 8. 3)

安心院町大字萱籠地区全域の3~20年生スギ人工林に発生, 6月中発見。被害面積5町。BHC粉剤71%散布, 夜間林地付近で虫寄せを実施した。(県 8. 13)

○ スギノマルカイガラムシ

○ スギハムシ

○ オオスジコガネ

大分 玖珠郡九重町大字飯田, 玖珠町大字日出生, 小田, 山田の2~30年生スギ人工林に発生, 7月10日発見。被害面積43町, 被害本数86,000本。BHC粉剤73%散布, 焚火誘殺を実施した。

(玖珠農林事・石井吉日 Ag. 8. 1)

○ カラマツアカハバチ(推定)

福岡 南会津郡田島町, 下郷町, 館岩村の3~40年生カラマツ人工林に発生, 6月24日発見。被害面積34町。昨年は6月中旬から8月初旬までと9月中旬の2回加害されたが, 微害である。(県 7. 24)

○ カラマツアカハバチ

群馬 利根郡水上町大字藤原上ノ京の27~28年生カラマツ人工林に発生, 7月9日発見。被害面積80町。7月15~16日に現地調査したが虫体はみられなかった。7月22~23日には成虫大群が発虫していた。8月3日幼虫の発生を確認し, 8月7日燻煙剤を使用して駆除, 効果が

あつた。(県 8. 9)

長野 南佐久郡川上村大字御所平字女山の25~30年生カラマツ人工林に発生, 7月10日発見。被害面積5町, 被害本数5,000本。現地は標高1,300m北東~北面傾斜。

(南佐久地事・上村武夫 Ag. 7. 29)

長野局松本署鳥川経営区1林班ろ(東築摩郡四賀村官行造林地)の34年生カラマツ人工林に発生, 7月20日発見。被害面積23町2反8畝, 被害8,000本, 被害材積12,000石。成虫が無数に飛んでいた。

(松本署・五十嵐茂雄 7. 22)

○ クリタマバチ

福島 安達郡二本松町, 安達村の3~30年生天然クリに発生, 5月3日発見。被害面積激害650町, 被害材積3,500石。岩代町, 東和町の8~20年生天然クリに発生, 5月4日発見。被害面積110町, 被害材積66石。

伊達郡川俣町, 飯野町の12~30年生天然クリに発生, 4月5日発見。被害面積激害1,500町, 中害1,000町, 微害500町, 被害材積17,000石。その他郡内一円の2~25年生クリで4月24日発見。被害面積激害750石, 被害材積30,000石。

福島市, 信夫郡飯坂町, 吾妻村, 信夫村, 松川町の5~40年生天然生クリに発生, 4月10日発見。被害面積758町, 被害材積13,320石。県下合計5,268町, 63,886石。

(県 7. 24)

石川 県下各地の薪炭林内天然生クリに発生, 4月10日~5月30日発見。防除計画は天敵移植と品種改良による。その被害面積と被害材積は次の通りである。

江沼郡南郷村激害50町, 1,000石。大聖寺町激害45町, 900石。三木村激害810町, 16,200石。三谷村激害1,350町, 22,000石。山中町中害59町, 微害80町, 19,500石。山代町激害100町, 中害300町, 微害388町, 15,760石。能美郡辰口町激害18町, 350石。

小松市激害10町, 中害204町, 微害288町, 19,411石。

石川郡鳥越町激害200町, 中害200町, 微害300町, 16,400石。吉野谷村激害250町, 中害50町, 微害50町, 7,000石。尾口町激害1町, 350石。鶴米町中害5,000町, 100,000石。

河北郡高松町激害8町, 中害2町, 684石。津幡町激害193町, 中害2町, 微害137町, 11,484石。森本町激害100町, 中害43町, 10,785石。

金沢市激害15町, 中害51町5反, 微害475町, 22,150石。県下合計10,779町5反, 263,974石。(県 7. 13)

長野 更級郡大岡村字棚原外接続6地籍の3~60年生薪炭林内クリに発生, 5月27日発見。激害170町, 中害22町, 微害23町, 被害本数286,900本, 被害材積4,200石。栽培グリには被害は少なかったが当地方はクリ材を家屋修理材として貴重視しているため, 伐倒防除を実施したことは経済的に大きな被害である。

県下累計990町, 286,900本, 18,450石。(県 7. 24)

愛媛 大洲市森山町他2町村のクリ人工林に発生, 5

## 森 林 防 疫 ニ ュ ー ス

月10日発見。被害面積13町2反，被害本数3,250本。喜多郡内子町の15年生以上のクリ人工林に発生，4月2日発見。被害面積激害6反，中害21町3反，微害10町9反，被害材積3,241石。

周桑郡丹原町田滝字カツラ谷の15年生クリ人工林に発生，被害面積3反，被害材積75石。(県7.27)

### ○ マツノシントメタマバエ

大分 玖珠郡九重町大字田野のアカマツ人工林に発生，8月18日発見。被害面積300町，被害本数7,500,000本，被害材積28,000石。(県・長野愛人 Sp. 8.20)

### ○ スギタマバエ

岡山 真庭郡湯原町見明戸の15年生スギ人工林に発生，5月1日発見。被害面積1町。久世町檜東の15年生スギ人工林に発生，4月25日発見。被害面積3反。

津山市上横野戸谷の7～8年生スギ人工林に発生，31年11月6日発見。被害面積1町。

苫田郡苫田村大字箱上り寺，大字杉字足谷，右どち，大字西尾字市奥の9～15年生スギ人工林に発生，4月20～25日発見。被害面積1町2反。

英田郡東栗倉村の8～10年生スギ人工林に発生，5月1日発見。被害面積20町。大原町にも発生，4月25日発見。被害面積4町。(県8.9)

### ○ スジコガネ

### ○ スギタマバエ

群馬 群馬郡榛名町大字間野山町有林の1～5年生スギ，カラマツ造林地に発生，8月6日発見。被害面積100町，被害本数150,000本。

(榛名町・小沢清一 Ag. 8.8)

### ○ スギノハダニ

秋田 秋田局増田署横手市官行造林地(横手市大字見入野字一の坂)の17～20年生スギ人工林に発生，7月10日発見。被害面積40町，被害本数30,000本。同地域幼令林では被害がない。(増田署・柴田健一郎 7.20)

秋田局大曲署協和村官行造林地2林班(仙北郡協和村大字荒川)の昭和25～28年植栽スギ造林地に発生，7月18日。被害面積2町，被害本数3,300本。周辺民有林の幼令木は全部被害があるが，面積は不明，まん延のおそれあり。(大曲署・菅保松次郎 8.1)

秋田局五城目署官行造林地1，2林班(秋田市金足)の5年生スギ造林地に発生，7月4日発見。被害面積17町，被害本数14,600本。(五城目署・武田覆治 8.2)

新潟 新津市大字金津と小須戸町大字矢代田地区一町の3～10年生スギ人工林に発生，7月11日発見。被害面積激害10町，中害50町，微害150町。西蒲原郡巻町大字福井の7～8年生スギ人工林に発生，7月5日発見。被害面積激害5町，中害15町，微害10町。玉泉市橋田の6年生スギ人工林に発生，6月29日発見。被害面積4町。激害地にはEPN又はDN剤を散布した。

(県7.24)

7月24日付一部報告をしたが，被害は県下一円の10年生以下の幼令林に甚だしく，現在の確認被害面積は次の通り。

玉泉市5町，新津市200町。新発田市25町。糸魚川市5反。十日町市100町。

西蒲原郡巻町40町。岩室村100町。弥彦村60町。岩船郡関川村20町。朝日村15町。山北町30町。佐渡郡新穂村100町。赤泊村50町。金井村200町。相川町30町。畑野村80町。

中蒲原郡村松町30町。北蒲原郡笹神村5町。東蒲原郡上川村5町。中魚沼郡津南町40町。

刈羽郡朝日村1町。二田村3反。米山村3反。北条村3反。県下合計1,137町4反。

ネオサツピラン乳剤，DN，EPNの粉剤散布の実施を指導している。(県7.26)

佐渡郡新穂村の5～20年生スギ人工林に発生，7月5日発見。被害面積50町。赤泊村一円の同令スギに発生，被害面積46町。羽茂村では7月23日発見。被害面積5反。畑野村では5～10年生スギに発生，7月7日発見。被害面積2反。

中蒲原郡村松町大蒲原の3～8年生スギに発生，7月10日発見。被害面積100町。

玉泉市川東，川内一円の3～7年生スギ人工林に発生，7月12日発見。被害面積25町。

西蒲原郡弥彦村の3～20年生スギ人工林に発生，7月5日発見。被害面積70町。(県8.5)

三島郡西越村の5～15年生スギ人工林に発生，7月1日発見。被害面積中害5町。(県8.20)

鳥取 日野郡江府町大字洲河崎の5年生スギ人工林に発生，6月29日発見。被害面積1町。被害本数2,000本。伯耆町大字宮内の6年生スギ人工林に発生，7月8日発見。被害面積6町，被害本数6,000本。

八頭郡智頭町大字奥本の5～6年生スギ人工林に発生，7月9～11日発見。被害面積2町8反。大字智頭の10～12年生スギに発生，6月22～25日発見。被害面積3町1反3畝，被害本数9,300本。船岡町大字大江の7年生スギ人工林に発生，6月15日発見。被害面積1町。

岩見郡国府町大字大石他の5～6年生スギ人工林に発生，6月2日～28日発見。被害面積2町2反。被害本数6,000本。岩美町大字白地の6年生スギに発生，6月25日発見。被害面積6反，被害本数1,200本。

(県7.23)

島根 八東郡東出雲町字上意東の4年生スギ造林地に発生，6月1日発見。被害面積1町。(県8.13)

大分 津久見市の12年生スギ人工林に発生，7月12日発見。被害面積2町。(県8.6)

宇佐郡院内村大字上船木の10年生スギ人工林に発生，5月中発見。被害面積1町。(県8.19)

## 解 説

## エゾマツ苗雪腐病の病原菌について

伊 藤 一 雄

私が林業試験場に勤務してから間もない昭和12年(1937年)のある日のこと、栃木県で採集されたツガの病名鑑定依頼があつた。標本をみると枝葉におびただしい量の灰褐色菌糸がからみつき、一見して特異な性状を呈していたが、未熟とみえて菌の子実体らしいものは見られなかつた。北島先生もそれまで見たことのない病気のように判定に苦しみ、当時東大教授をしておられた草野俊助先生にうかがつたところ、「これではないかね」といつて示されたのが、到着後間もない米国の植物病理学会雑誌「ファイトパソロジー」(Phytopathology 27,305, 1937)に出ているヘプティングおよびダヴィドソン(HEPTING & DAVIDSON) 両氏の記事であつたそうである。



第 I 図  
カナダツガ上のロゼリニア菌  
[HEPTING & DAVIDSON 原図]

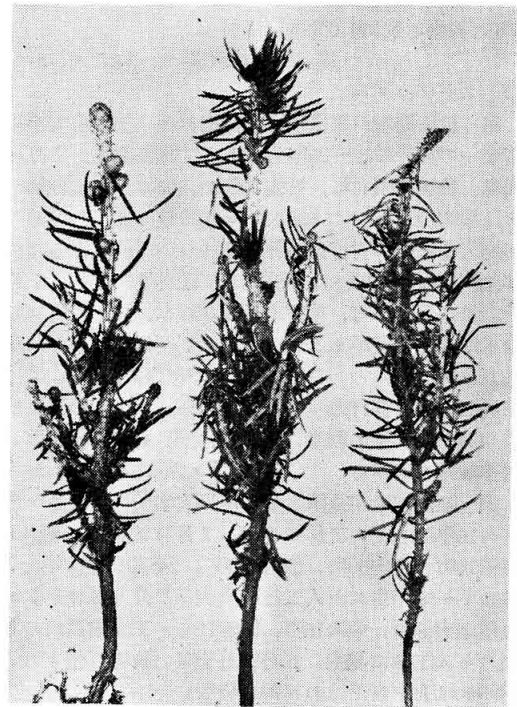
ヘプティングおよびダヴィドソン両氏は米国ノースカロライナ州のカナダツガにある種の病害を見出し、この病原菌を新種と認めロゼリニア・ヘルポトリキオイデス(*Rosellinia herpotrichoides*)と命名したのであるが(第I図)、前記栃木県産ツガの病害とこれがよく一致したのである。惜しいことに、この標本は戦災によつて

焼失してしまつた。

北海道においてエゾマツ苗に大害をおよぼす雪腐病菌は久しくその本体がわからなかつたのであるが、当時鉄道大臣官房研究所におられた笠井幹夫氏は、昭和13年(1938年)に、札幌鉄道局管内音威子府苗圃の罹病苗にロゼリニア菌を見い出

し、これは米国から報告されたロゼリニア・ヘルポトリキオイデスと一致することから、エゾマツ雪腐病菌としてこの菌をあてた(笠井 1940)。これと前後して帝室林野局林業試験場から出された「森林病虫害図説」にも、エゾマツ雪腐(雪枯)病菌としてロゼリニア菌をかかげてあるが、これは笠井氏の意見に従つたものではあるまいか(小川 1939)。

戦後私は北海道産のエゾマツおよびトドマツの雪腐病標本を調べているうちに、この病原菌について大きな疑問をいただき、笠井氏の報文をくわしく読んでみた。笠井氏はエゾマツ苗にロゼリニア菌を見出したことは事実であり、この菌をヘプティング・ダヴィドソン両氏のロゼリニア・ヘルポトリキオイデスと同定したこともまた誤りが無い。しかし、笠井氏は基本的なひじょうに大切な点に手ぬかりがあつた。それは雪腐病が発生する



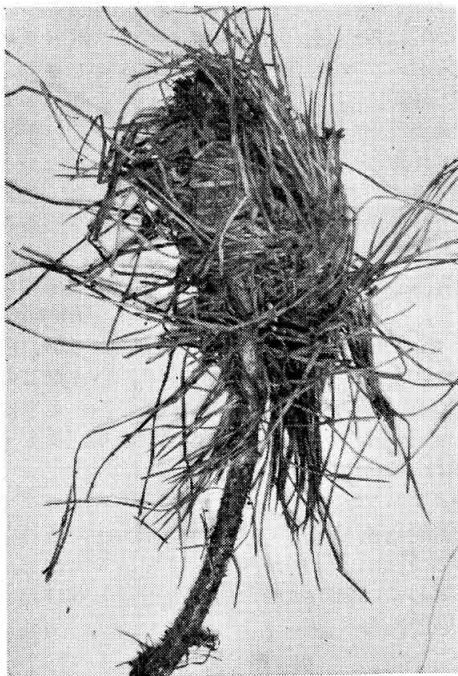
第II図 エゾマツ苗の雪腐病 (北海道産)



のはいうまでもなく早春であるが、ロゼリニア菌を見出したのは夏以後のことである。菌糸が顕著にからまりついている病徴や標兆がにていることから笠井氏は、実験的に確かめることなく両者を直ちに結びつけて同一菌としたのである。

私はエゾマツ雪腐病菌とロゼリニア菌との関係についてすでに次のように述べた(伊藤 1955)「ロゼリニア菌による病気も、またエゾマツ雪腐病も、菌糸がいちじるしくからまりついている状況はよくにている。しかしよく注意して比較してみると、ロゼリニア菌の菌糸は灰褐色、雪腐病菌では暗緑色であり、また両者が同一菌だと速断できない大きな特徴として、ロゼリニア菌の場合はボトリチス(*Botrytis*)型の分生孢子が患部に形成されるとの記載があるが、一方雪腐病では今日までのところ、この種の孢子はまったく見いだされていない。...雪腐病菌をロゼリニア・ヘルポトリキオイデスとした根拠はすこぶる薄弱で、もう少し厳密な研究によつて再検討する必要がある...」と。

秋田支場の佐藤邦彦技官らは過去数年にわたり、北海道産の雪腐病にかかつたエゾマツおよびトドマツ苗から常にある種の同一菌を取り出し、これが病原菌であることを確認している。そしてこの菌はひとり北海道だけでなく、東北地方においても分離検出され、マツ類、ヒノキ、ヒバ、モミ類、ハリモミ類およびスギなど多くの針葉樹苗に1種の雪腐病をおこしてはげしい病原性をもつ



第Ⅲ図 アカマツ苗の暗色雪腐病(秋田県産)  
〔佐藤氏原図〕



第Ⅳ図 スギ苗暗色雪腐病  
(秋田県産)

ていることがわかつた。そしてこれは苗畑だけでなく、林地でも新植地に激害を与え、多雪地方に広く分布するものであることが明らかにされるに及び一層注目されるようになった。スギ苗のいわゆる雪腐病として、すでに菌核病と灰色かび病が知られているので、これらと区別するために、かりに「暗色雪腐病」とよぶことにした(第Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ図)。

このように、エゾマツ苗のいわゆる雪腐病菌はエゾマツ苗だけに限るものではなく、いろいろな針葉樹に「暗色雪腐病」をおこし、また北海道以外の東北地方などにも広く分布する重要病原菌となつたので、この菌の正体を確める必要がさらに大きくなつて来た。エゾマツの雪腐病を永年手がけている北海道支場の魚住正技官も最近、この病原菌をロゼリニア・ヘルポトリキオイデスとする意見に疑問を持つておられる(魚住 1956)。

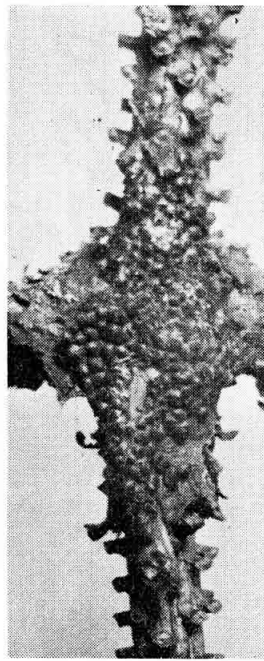
そこで佐藤技官にすすめて、この疑点を究明してもらふことにしていたが、実験材料の入手に手間どつてなかなか仕事が進まなかつた。

昭和30年11月、魚住技官が北海道でクロエゾに採集(10月下旬採集)したロゼリニア菌の寄贈をうけて形態比較の結果、これをロゼリニア・ヘルポトリキオイデスと同定できたが、採集してからかなり時日が経過していたため、この菌の分離・培養は不能に終つた(第Ⅴ,Ⅵ,Ⅶ図)。

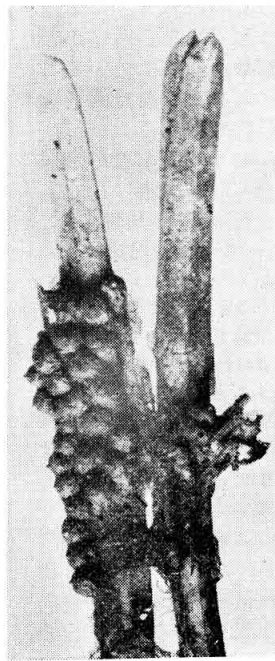
昭和31年9月、本場保護部千葉修技官が静岡県でウラジロモミ上に採集したきわめて好適な状態のロゼリニア菌を寄贈してくれた(第Ⅷ図)。これはまことに良好な標本で、輸送方法も適切であつたため、ボトリチス(*Botrytis*)型分生孢子も確認でき、また子嚢・穀子嚢胞子などの形状、測定値はヘプティング・ダヴィドソン両氏のロゼリニア・ヘルポトリキオイデスに正に一致した。そして佐藤技官はついにこのロゼリニア菌の子嚢胞子から



第V図 クロエゾの枝に形成されたロゼリニア菌の菌糸 (北海道産) (拡大)



第VI図 クロエゾの枝に形成されたロゼリニア菌の子嚢殻 (北海道産) (拡大)



第VII図 クロエゾの葉に形成されたロゼリニア菌の菌糸と子嚢殻(北海道産)(拡大)

分離, 単個培養に成功した。

エゾマツ雪腐病菌 (暗色雪腐病菌) とロゼリニア菌の純粹培養を比較してみると, 菌叢の状況に大きな差が認められ, また発育に対する温度にもいちじるしいちがいがあり, 雪腐病菌は好低温菌であり, ロゼリニア菌は好中間温菌と認めてよいものようである。これは自然状況下において雪腐病菌は早春に, またロゼリニア菌は晩夏〜秋に顕著な菌糸網を形成する事実とよく一致する。接種試験による病原性にもまた大きな差が認められるようである。

いずれ近いうちに佐藤技官からくわしい報告が出されることであろうが, 同技官の研究

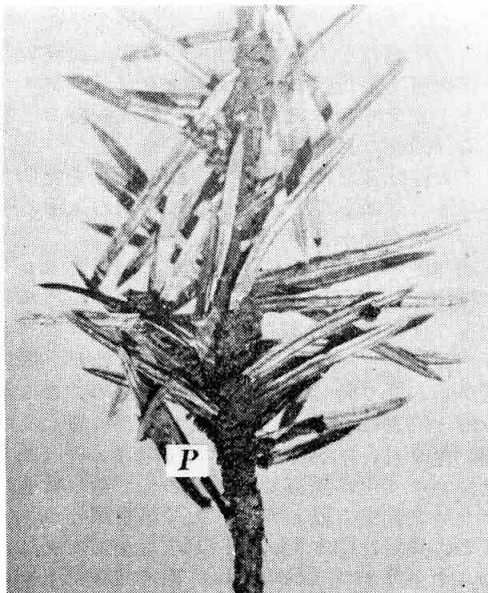
によつて, 永い間, ロゼリニア・ヘルボトリキオイデスがエゾマツ苗の雪腐病菌とされて来た, 通説はこれによつて否定されることになり, ロゼリニア菌は雪腐病とは直接の関係は無いことが明らかにされたわけである。

それではいつたい, エゾマツ雪腐病菌 (暗色雪腐病菌) の所属, 学名はどのようなものであろうか? この菌糸の色, 病原性, これによる病状などからみると, 歐洲で各種の針葉樹に雪腐病をもたらす, ヘルボトリキア・ニグルム (*Herpotrichia nigrum* HARTIG) とよく似ているが, 佐藤技官の非常な努力にもかかわらず, いまだこの菌の孢子型は発見されず, 所属未詳というよりほかない。しいて所属を求めるならばリゾクトニア (*Rhizoctonia*) 属に入れるしかない。

ロゼリニア・ヘルボトリキオイデスはエゾマツ苗の雪腐病菌ではないことが明らかにされたので, この菌によるエゾマツ, ツガ, モミなどの病氣に対して, 何か適当な病名を考定しなければならぬであろう。

引用文献

HEPTING, G. H. & R. W. DAVIDSON (1937):  
A leaf and twig disease of hemlock caused



第 VIII 図

ウラジロモミ枝葉上のロゼリニア菌の菌糸と子嚢殻 (静岡県産) (すこしく拡大)

by a new species of *Rosellinia*, *Phytopath.*, 27, 305~310

伊藤一雄 (1955) : 図説樹病講義, 101~102

笠井幹夫 (1940) : 鉄道防雪林に於けるヒノキ漏脂病とエゾマツの雪腐病, 鉄道大臣官房研究所業務研究資料 28 (9), 1~7

[小川 隆] (1939) : 帝室林野林試, 森林病虫害図説 病害編 2, 5

魚住 正 (1956) : エゾマツ雪腐病に対する一私見 北方林業 8 (6), 134~136

(林業試験場保護部・農博)



観 察

誘蛾灯の周辺にネキリムシは  
どのように増加するか

余 語 昌 資

本誌の Vol. 6, No. 5, p. 16 にのつている泉氏の「誘蛾灯によるコガネムシ類の誘殺状況」という報告のなかに、灯を中心にもつともネキリムシ分布度の高い箇所は半径5~20mの範囲で、20m以上はなれている箇所では、灯の影響はほとんどみとめられない。また5m以内においても分布度が甚だ低いようである、と書かれている。

これはわれわれの調査結果とかなりちがうようだから、どのようにちがうのか比較検討してみたい。

それから、さいきん害虫の発生予察や実際殺虫のために誘蛾灯をつけようとするのがおおくなつたが、これに対するある不安...すなわち、コガネムシのばあいなら苗畑外から侵入したものが灯の周辺におちて産卵し、かえつてネキリムシの密度を増加させるのではないかという不安...をもつことがおおいようである。

このことは、その言動に相当影響力のある人もしばしば口にするようで、中村賢太郎氏なども「終戦後全国的にひろまつた誘蛾灯はすっかり廃止されたのに、近ごろ苗畑でさかんに蛍光灯を使いはじめたのは理解しかねる。」と秋田地方の視察記に書いておられる (秋田営林局報 1956, 11号)。

しかしこれは、誘蛾灯とコガネムシの関係を応用生態的にしらべた結果からではなく、まえに農業害虫ニカメイガ等についてしらべられ、いわれたことをただ無批判に受け入れているのではなからうかとおもう。

こういう点からもこの問題は一応明らかにして

おかなければならない。

われわれの調査はだいぶ前のものであり、それからの考察にも、欠ける点があるかもしれないので、御批判をねがいたい。

I われわれの調査結果

この調査結果は、1953年に、林試秋田支場時報 No.5 に報告したものであるが、M苗畑では、乾式ロト式青色蛍光灯1カ所について、灯(虫受の縁)から東西南北へ1m, 5m, 10m, 20mの間隔で1m×0.5m=0.5m<sup>2</sup>内の幼虫数を調べたのと、S苗畑では水盤式の3カ所について、やはり東西南北へ0.5m, 1m, 5m, 10m, 20mの間隔でしらべたものである。

第I表 M苗畑における調査結果 1灯

灯よりの距離 m	東	西	南	北	計	平均
1	15	7	14	20	56	14.0
5	7	1	5	1	14	3.5
10	1	0	11	3	15	3.8
20	0	12	3	2	17	4.3
計	23	20	33	26	102	

(乾式)

## 森林防疫ニュース

第II表 S 苗畑における調査結果 3灯平均

灯よりの距離	東	西	南	北	計	平均
m						
0.5	68	53	55	18	194	48.5
1	18	20	6	8	52	13.0
5	1	5	1	2	9	2.3
10	1	4	3	3	11	2.8
20	0	6	0	1	7	1.8
計	88	88	65	32	273	

(水盤式)

第I, 第IIの表からいえることは, 東西南北の間に差がないこと, 光源からの距離では5m以上は差がみられないことである。

5m以内の箇所をもつと数おおくしらべておくと, 距離の関係がもつと明らかにできたとおもうが, これを図上から判断すると, 誘蛾灯の影響を受ける限界は, 光源をはなれるにしたがい急に減少して, せいぜい2m以内ではないかと考えられる。

われわれは以上のことから, 苗畑などに誘蛾灯をつけるばあいは, 2m以内を危険地として, 苗木の生育地をさげ, なるべく裸地や緑肥栽培地に設けるようにし, またそこは秋になつて, 殺虫剤をすきこむべきだと考えてきた。

## II 泉氏の結論に対する批判

泉氏のネキリムシ分布表をみると, 密度は一見光源より南方の10m前後の距離において高い。

しかし, この数値を検討させてもらうと, 方位間にも, 距離間にも偏差がおおきすぎ1つの母集団として灯との関連をみつけることはできないようである。

われわれが, 苗畑などを小さく区割してネキリムシの密度をしらべると, その分布は機械的分布から, とくに斑状構造を示していることに気がつくことがおおい。この原因はいろいろ考えられるが, 自然ではむしろこれが常態であると考えられる。

泉氏の表にみられる集中分布も, だから, チャンスによるものと考えていいのではなからうか。

そこで, 誘蛾灯の近辺にだけ虫がおおくなるという原因について, いささか考えてみたい。

光源に向つてとんできた虫が, 垂直なガラス翼にぶつかると, 翅をつぼめ1つの物体のように落

下する。

大部分は, その下の水盤なりロトに入るわけだが, ぶつかりかたによつては, わずかにこの虫受けの外におちるわけである。これが産卵し, いわゆるネキリムシの密度が高くなるといつているわけである。

このばあい, とんできた成虫が灯に到着せずある地点に着陸したり, 一度灯に近づいたものがある距離だけ引かえして着陸するなどということは一寸考えられない。また灯のそばで観察していても, このようなことは見かけられない。

つまり灯のちかくに落ちるといふことは, もはや生物の行動ではなく, 垂直の壁にぶつかった石ころのようなまつたく物理的現象といつていじらう。

もつともこのばあい, 灯の下がコンクリートのようのものであつたとしたら, 成虫は土中に潜入できないので, 土のあるところまで四方に散つていくだろうけれども。

泉氏の調査も3m以内に2, 3カ所調査区を設けていればもつと明らかな傾向がつかめたのではなからうか。

## III むすび

かならずしも十分でない資料から, いささか論をすすめすぎたかもしれないが, はじめに書いたあやふやな不安を再検討するチャンスになればとおもつたためである。

さてさいごに, 誘蛾灯をつけると苗畑外から害虫をおびきよせるかということについて....。

これも, 害虫密度増加のことといつしよに問題にされることであるが, ふつう, 灯が苗畑周辺からどれだけの距離にあるかということも, 苗畑との隣接地がどんな環境で, またどんな種類のもものが棲息しているかということもまつたく考慮に入れていないことがおおい。

日塔・立花両氏は, 光源から遠ざかるにしたがつて, 捕獲率が双曲線を書いて逡減する(おおよそ5mで70%以上, 160mで10%, 300mほとんど0)と報告している(林学会誌 34(7))。

誘蛾灯の設置にはこれらのことをすべて考慮すべきであるが, ふつう使われている誘蛾灯の危険区域がわずか2m以内であるとしたなら, その危険区の処置もきわめて簡単なことだし, 苗畑のどこに設置しようと, さほど心配はないといえるのではなからうか。

(林業試験場釜淵分場保護研究室長)

## ハジマクチバの防除例

齋 藤 諱

マダケの重要害虫のひとつとして知られているハジマクチバは各地にみられ最近の資料をしらべても、京都、神奈川、兵庫等の府県で発生した例が報告されている。筍が出て、大体発筍本数の20~25%は、本害虫のために枯死するか、枯死しないまでも、節間が不規則になり利用上の支障を来し、竹林の減収をまねいている。マダケの需要が増してきた現在では、この被害も軽視出来ない状態である。最近BHC粉剤が水田、山林等で盛んに使用されているが、本害虫駆除に使用した処全く効果がなく失敗したと云う他県の例も聞いているので、一地区の共有竹林の防除指導を乞われ農業改良普及員と協力して行つた処、みるべき成果をあげる事が出来たので、参考に供したいと思う。

## 被害地及発生の概要

被害現地は飽海郡八幡町北平沢、寺津地内で標高50~80mの山地に生育するマダケ林である。大部分が西に面した10°~20°の傾斜地で、タケの平均周囲4寸、地位下の竹林である。所有者は、高橋浅治、高橋金太氏外数名の共有で、従来まで本害虫の防除法はないものと諦めていたが、その被害数量が毎年かなりの量になることや稲作の害虫防除は農民の常識になつて来ている点から積極的に防除対策を樹てた。

この地方の筍は普通7月初旬から7月の中旬過ぎまで、従つてハジマクチバの発生するのも7月初旬にわたつている。7月3日現地調査した結果、本害虫の発生量も少く、1反当りから1~2本程度見るに過ぎなかつた。侵入した幼虫は筍の先端に直径1mm程度の孔をあけ深さ1cmほどの箇所へ棲息し体長3mmであつた。7月16日の調査では筍の内部5.6cmの深さに侵入し、幼虫の体長も3.3cmであつた。幼虫が老熟して、蛹になるのは7月下旬である。幼虫が筍に侵入する場合、先端からと中ごろから侵入するものがある。筍の先端からはいるものが70~80%を占め初旬に侵入する幼虫が多い傾向があり、筍の中ごろから侵入する幼虫は、7月の中旬に多い傾向があるようだ。この地方では7月初、中旬にかけ発生するが、多発するのは7月7日~7月15日までである。

## 防除対策

従来の防除法の主なものに捕殺法や砒酸鉛、パ

ラダイクロールベンゼン等の化学薬品の使用があげられるが、防除費、資材、労働力の問題等があり、特に砒酸鉛は山地の広大な面積では頗る不便である。残効性のあるBHC粉剤を使用すれば、運搬も便利で、動力撒粉器では時間、労力共軽減出来る。しかし本害虫は筍の内部に侵入する事や、発生期間がかなりの長期間である点等から透過性、残効性の長所をもつPB粉剤を使用する事も考えられる。そこで約5反にBHC $\gamma$ 3%粉剤を7月5日、7月10日の2回散布した。他は約1町づつBHC $\gamma$ 3%粉剤を7月7日に1回散布し、同日PB粉剤を他の場所に同面積散布した。背負式動力撒粉器2台を使用し、約10m間隔で、傾斜の上方から下方に向つて進行した。晴れた日で微風程度であつた。噴出孔は、腰の部分で水平に保つように努め筍の大きいものでも先端が薬剤で覆われるようにした。作業員は機械1台に2名とし、その結果次の様な功程であつた。

第 I 表

番号	実行月日	面積	薬品名散布量	人員	備考
I	7月7日	1町	BHC $\gamma$ 3% 24kg	4人 $\times$ 1/4日	1956年
II	7月7日	1町	PB粉剤 28kg	4人 $\times$ 1/4日	
III	7月5日 7月10日	5反	BHC 12kg, $\gamma$ 3% 12kg	2人 $\times$ 1/2日 2人 $\times$ 1/2日	

## 防除効果について

防除を行つてから3週間後に、各区約2反を調べた。ほぼ条件の似かよつた竹林で薬剤防除を行わない100本について調べたが、本害虫の被害

第 II 表

種類	調査本数	被害本数	その他の被害本数	備考
BHC粉剤 2回散布	200本	7本	5本	その他は水枯病による枯死調査面積約2反
BHC 2回散布	200本	4本	7本	同上
PB粉剤 1回散布	200本	6本	5本	同上

23本を数えた。これらの結果から7月7日前後BHC $\gamma$ 3%粉剤反当2.4kgを1回散布すれば防除の目的は達成される。防除効果を考究すると次の点があげられる。

(1) 経費 防除費は農作物の場合、粗収益の5~10%以内と云われているが、竹林の防除費は従

来の粗収益の約4.2%で駆除の効果がみられ毎年の粗収益を15~20%程度向上する事が期待出来る。駆除経費、粗収益を比較してみると次の通りである。防除費はPB粉剤がBHC粉剤1回施

第Ⅲ表 粗収益表

平均伐竹束数	面積	単価(一束当)	総額	備考
150束	1町	300円	45,000円	防除以前の収入
178束	1町	300円	53,400円	防除実施後の収入

第Ⅳ表 駆除経費比較表

種類	薬品代	人夫賃	総経費
BHC 1回施用	1,600円	300円	1,900円
BHC 2回施用	1,600円	600円	2,200円
PB 1回施用	3,780円	300円	4,080円

用経費の約2倍であるが駆除効果では大きな差は認められなかつた。BHC2回施用も経費上から比較して駆除効果があがらない。

(2) 労力資材実行の難易 労力の調整は容易で稲作用の動力撒粉器を共同で使用し、農薬も共同購入すれば廉価に計画的に実行が出来る。

(3) 本書虫の駆除はパラチオン剤を含むPB粉



動力撒粉器で駆除を行っている状況

剤のような特定毒物農薬を使用する必要は認められない。又BHC粉剤も適期さえつかめば1~2回散布の何れでも殆んど同じ防除効果をあげ得るが害虫、の発生の最盛期が各地方で異なるので、それを把握し、最盛期前にBHC 3%粉剤反当

2.4kg前後を使用すれば、駆除する事が出来る。酒田市近郊の場合、大体7月7日~7月10日とその期間である事がわかつた。

### 結 び

駆除実施後の経済効果がかなりあるので、防除は積極的に行い、竹林の増収を図るべきで、今後の問題点として、毎年防除重点期間が、この期間で良いのかどうか、又農薬散布による昆虫相に及ぼす影響水枯病の防除対策等々がある。

(山形県・保護 S.P.)

## 椎茸櫛木の

### 穿孔虫と対策

中野博正

去る5月28日徳島県那賀郡相生町延野駐在林業改良指導員添木仁技師が図(中野原図)のような標本を県林業指導所に持参して害虫の鑑定とその対策について相談に來られた。添木指導員の話を総合すると概ね次のようであつた。

被害発生場所は相生町相名で、被害材はカン。被害の発生は相生愛林クラブ会員平岡隆三氏が栽培している椎茸櫛木約1,500貫に及び、この原木は2月に伐採したものである。椎茸菌の接種は3月下旬に行つたが、その当時は虫害は認めなかつた。その後4月下旬櫛木を見廻つたところ害虫らしいもの多数の穿孔を発見した。従つて菌を接種

した後虫が飛んで來たものと思われる。そこで原木を伐採した林に行つて見るとその根株にも多数の穿孔が見られた。

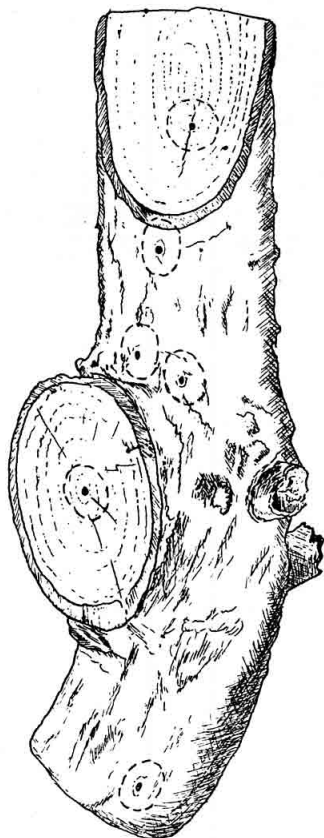
被害材の穿孔は樹皮面ばかりでなく枝の木口にも見られ、その模様から判定すると、この害虫はルイスザイノキクイムシ *Xyleborus Lewisii* BLANDFORD? と推定された。正確な種名を加辺正明博士に依頼したところサクラノホソキクイムシ *X. attenuatus* BLANDFORD である旨の回答に接した。何れにしても椎茸の櫛木がこの種の被害を受けたことは珍しいことであると同時に栽培家にとつては全く痛い大問題である。サクラノホソキクイムシもルイスザイノキクイムシもともにアムブロンシャ・ビートル *Ambrosia beetle* と呼ばれる甲虫類で、材に孔道をあけ、幼虫はこの孔壁に繁殖するアムブロンシャ菌を食つて生長すると云われている。しかもこの菌は虫が孔道の中に培養するもので、それを食とするところからアムブロンシャ・ビートル(養菌甲虫)と呼ばれるのである。ブナの害虫類のうちで、ロータリーベニヤの最大

の欠点と云われる“ピンホール”をつくるのはこれらの穿孔虫類で、その害はかなり古くから知られているが、椎茸櫛木に穿孔したと云う例は未だ見聞しないし、少くとも徳島県において椎茸栽培上の問題となつたのは初めてのようである。ところで、椎茸櫛木にこの穿孔虫が穿入した場合、穿孔孔は椎茸菌糸の発育する形成層部 **Cambium** とは関係の少い材部 **Xylem** だから、どれ程の実害があるか未知数だし、その対策として何をとり上げるべきかは第2段の問題であろう。

今仮りに実害があるとして、これらの穿孔虫類の穿孔防止法としてはブナ材についての試験結果から見ると“水中貯木”が最も完全である。しかし水中貯木にしても、

水面から出ている部分には穿孔を生じ、水中から引上げてからも穿孔を生ずるので、被害にかかる危険が多い。薬剤散布も **BHC $\gamma$  2%** 乳剤で約1カ月、場合によつては(虫の密度の低い場合等)2カ月以上有効と云われるが、散布量は最低 **1m<sup>2</sup> 当り 200cc** を必要とする。従つてその経費は必しも安くはない。また、原木伐採の時期については平岡氏は2月に伐倒しているが、かりにこの伐倒時期を前年11~12月に繰上げて矢張り虫害を受けるようで、誠に始末が悪い。

兎に角、当面の対策として原木伐採をした跡の根株の薬剤による処理は是非とも実行したい。虫害を回避し、椎茸菌の繁殖に支障を来さない防除の方法を編み出すことは今後椎茸栽培家や森林害虫研究者にとつて新しい研究課題の一つであろう。(徳島県林業指導所)



櫛木の穿孔(円内)

## 犀峽地区に入つた クリタマバチ防除の記

小林 健 登

山村の農業は最近苦境の瀬に追いつめられてきた。昔ながらの米麦中心の自給形態の農業は現金収入の道に乏しく、山林に生活の糧を求めているのが実態である。

私共農業改良に働く者は最高の目標を農家経営の改善におくためにも、耕種面の収益性増加と同時に地域に適合した耕種以外の果樹、畜産等、又山林の問題を研究すべきであると思う。

そこで、犀峽地区のように山林面積が多く、山林に対する依存度も高い地域においては、農業経営改善の目標を林産資源の活用と山林の振興に求めるべきであり、又その方向をたどつてきた。その現れは椎茸やクリの栽培による樹木農業としての経営の組立である。例えば、耕地と山林原野の面積を比較してみると耕地の面積は山林原野の3分の1に当っている。これを有効且適切に経営し、耕地と同様年々収入の上る経営組織を作つたならば、相当安定した農家経営が行われると思う。

しかし、山林原野の中には、公有林あり、保安林あり、クリ栽培にも適、不適ありして、全部を活用することは困難であるが、実際栽培できる面積は山林原野の50%以上はあると思われる。

懇談会等を通じてその重要性を普及すると同時に、接木、品種改良、その後の管理等栽培技術の問題にも最善の努力をわれわれは払つてきたのであるが、今回思わぬ大障害にぶつかり、大きな衝撃を受けた。

### クリタマバチの発見と被害調査

前述の努力の結果、クリの栽培熱が各所に高まり、集団栽培の傾向をとり、大面積栽培がなされるようになって、クリの接木が広く行われてきた。

この5月17日、突然一倉田和地区某氏より、夜有線放送を通じて、クリタマバチ発見の知らせがあつた。

翌日直ちに私共普及所が調査に当つてみると、被害地域は意外に広く、当初約5反といわれたものが、全山くまなく害されているようである。

この地区の山林は割合にクリが多く、ゴールが最初発見された林地は、一般の雑木林を薪炭用に4~5年前伐採し、クリだけを残して子実の採取地としたもので、大木が密生し、品種改良はなされていないが、収穫量は相当にあつた。

この事態に対し、牧郷森林組合と共に細密調査

## 森 林 防 疫 ニ ュ ー ス

と防除対策の研究に当ることとなつたが、小面積であるならば、伐採や焼却等の防除作業も簡単に行われるが、大面積となつては防除の手段が困難となる。その上時期的に水稻の植付直前であり、農家は伐採作業に出動するのも困るということで、一時は防除にとまどつた。

しかし、地方事務所や県林政課に連絡して、防除に進むこととなつた。

5月22日、地方事務所より係員が範囲を確認する目的で現地へ登つたが、被害区域は拡大するばかりであつた。森林組合長も加わり、一応調査終了後、現地に腰を下して善後策を鳩首した。

問題はこの犀峽地区一円をクリの産地にしようという振興方策の途上であり、また、これを放置すればこの地方全域に、さらには北信地区全体に被害が広がる危険性もあるということである。田植直前の農繁多忙時期ではあるが、地元民に短期間出動を願い、後は学童の出動によつてゴールの採取を計ることに無理を承知の上で決定された。防除方法としては結局、ゴール採取、そのための伐採、焼却より手段がないということになつたからである。

24日は一倉田和公民館に地域農家の方々全員の参集を願い、県林政課、地方事務所等関係者が現地調査をしたその足で公民館に臨んだ。

まず、県の担当者出川技師より、クリタマバチの習性と被害状態を説明した。私からは被害木伐採によつてゴールを採取し、まん延防止に努めるよう提案する。なお、防除組織をつくつて、対策をきめるよう話を進めた。

農家からは、前述のように、田植直前4～5日というが、これは無理であり、この地区としては今後の山林造成やクリタマバチまん延防止も必要であるが、耕地面積の40%以上の水田を無視することは一層無理であると強硬な反論が出て、斗論されたが、結局、今晚のうちに、各地区毎の会合を開き、対策委員会のことを話し、委員の選出もするという事となつて、私共調査団一行は他の地域の被害状況調査をするため、南牧、大月の地区を廻つた。

ところが、南牧も一倉田和より発生程度は少ないが、クリというクリは全部被害を受けて、面積は広く、又大月の地区は予想以上の被害状況である。そのまん延の経路も一倉田和とは異なるようである。以上の調査によつて、関係の被害面積は実に250町と推定される。この結果から、他の隣接地区にも再度調査を進めることと共に、一応今回までに明かになつた発生地域を完滅することが急務であろうとして、防除委員の活動を進ませることになつた。

### 防除対策委員会と駆除の準備

26日の夜各部落毎に選出した対策委員の初会合が「クリタマバチ防除対策委員会」として開かれた。まったく電光石火の如き早業の連続的な会議である。委員の選出は一倉田和5名、中山8名、南牧4名、大月2名、和田吐唄2名、計21名で、全員が出席した。森林組合長が座長となつて話を進め、役員を選出に移つた。

事業主体を森林組合とするか、役場とするか、いろいろと経緯はあつたが、結局役場が主体となり、その指示の下に防除組織をつくるということに決した。委員長の問題はなかなか難行したが、委員の中から「森林組合長が先頭に立つて防除することが最適である」との提案があり、結局、問題が問題だけに組合長も承諾した。副委員長長の選出は簡単に進み4名が選出され、ここに一応組織ができて上つた。

さらに被害地区を細かく確認するために明27日各1戸1名宛を動員して班別に調査することをきめて初会合を終つた。

27日は町役場で対策委員会が開かれた。地方事務所からは上野技師来町、28日から防除作業のため1戸1名以上出動することを決定した。たまたま開かれていた町議会でも、被害を最少限に食い止めるため最善の方途を講ずることになつた。午後、もう一度関係者が現地を廻る。林道とはいいながらジープもやつとという巾着で、よほど自信のある運転手でなければ走れない。

現地を見れば見るほど一行は歴然とするばかりであつた。調査終了後、有線放送を通じて「関係地域の皆さんへ」と題して町助役村田尚夫氏と上野技師から地元へのよびかけを行つた。

駆除に要するあらゆる手配ができて、準備完了し、夜更けて宿舎へ帰つた。

### 駆 除 作 業

28日は快晴にめぐまれて、一倉田和掘割地区に150人をこえる人数が集まる。農繁期であるからという一時の異論もあつたが、本日出動した人々の気持は責任感に燃えて張り切つていた。

まず、実行委員長小林義隆氏が挨拶、班の編成をすませ、各班は道路にそつて黒塚地域に一列に散開した。中には婦人も加わり、ゴールをいれるリュックサックを手に、刃物はなた、鋸等武蔵坊弁慶そのままのいでたちである。また、班毎に焼却の準備ができ、石油が配分された。

7時半一斉にクリが伐り倒されはじめた。大木は地際から伐るより樹上に上つて被害枝を切断する方が容易だと木のぼりする者もあり、勇ましい作業光景である。各班から焼却の白煙がまい上る。みるみるクリ林の大木が片付く。午前10時

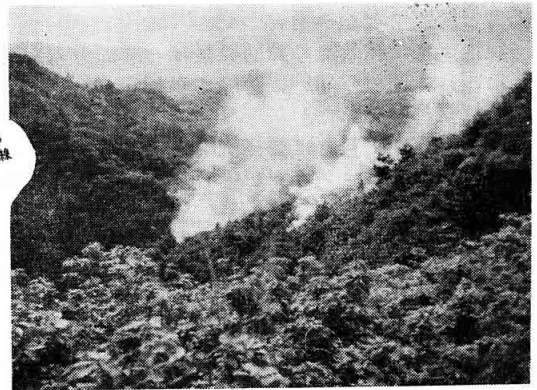


森林防疫 ニ ュ ー ス

までには黒塚一带の山の衣は切払われて、作業は進展してゆく。現地指導と督励のため地方事務所の安田林務課長一行がジープではせつめた。



第I図 クリタマバチ被害地区の略図



第II図 樹枝焼却の煙



第III図 被害枝の伐掛と焼却

被害現場は白煙につつまれ、大木が倒されてゆく様子は戦場のようなものである。作業の跡地は大木があるいは横わりあるいは枝を失つて枯木のように立っている。

安田課長は被害地域を一巡して、大月地区へゆく。この地区では調査班が活動していたが、被害が大きく長期を要するので、田植終了後に伐採が約束されていた。

各新聞社がジープで集つてきている。なかにはヘリコプターで来る者があり、いつもは静かな山も、この日ばかりはにぎやかであった。

昼食時を利用し、安田課長から全員に対し、「この地区で被害がくいとめられれば北信各地のクリ生産が助かるし、また新しい生産地をつくり出せる」

「田植の手をやめて出勤願つたことは感謝の極であり、この団結をもつて山林愛護に当れば豊かな村づくりはできると思います....。」とよびかけ、

また、委員会の活動をたたえて、声涙ともに下るの挨拶があつた。

午後は再び午前中にひきつづきの作業が行われる。足下は谷で、踏みはずせば命を落す急傾斜に働く姿もあり、サーカスのような高い木の伐採作

業もみられた。指導に当る者は負傷等の事故がおこななければよいかとそればかり心配をした。

休憩もとらず7時半まで作業が続いた。この労苦を全町民に伝えようと、林務課長は8時から有線放送を通じてよびかけ、出川技師もクリタマバチについて防除やまん延防止の注意を放送した。

29日は大岡村境地帯で防除作業を実施。また大岡村内を調査したところ、被害激甚で、中には「ここからわれわれの方へきたのだ、この発生中心地をこのままにして信州新町の一部を焼払つても効果が上るまい」と力説する者もある。異口同音に大岡地区も同様の駆除をしなければならぬと述べて意見が一致した。

この日は作業の要領を得たためか、前日の30町が今日は40町と進展した。

30日の第3日目も小雨ではあつたが、早朝7時

から作業に当る。

筆者は県と地方事務所へ連絡のため出張し、関係者と同道で現地へもどつた。

現地へ来た林政課の諏訪係長は一同に労苦を謝した後、大岡村へ向い、防除に歩調をそろえるように打合わせをした。

31日(第4日目)は曇後快晴、白煙の棚引く中を報道陣のヘリコプターが縫い飛び、鳴物入の防除日であつた。

関崎町長の案内で、風間和夫県議も現地を訪れて、伐採や焼却現場で「私もお手伝を」と手を出す姿がみられた。

農家から作業は短期間で終了するようにといわれながら、とうとう6月2日まで続き、一応被害地域の伐採作業が終つた。毎日男でも女でも、やむを得ない場合は子供でもよいことにした。しかし、一家から2人も3人もでているので、農作業がちよつとおくれ、クリタマバチはクリにも水田にも害があつたと口説く者がでてきた。

最終日の夕刻一倉田と公民館に作業終了後集合し、駆除実績の報告に合わせて委員長より6日間の出勤に対し労を謝した。また、筆者は町役場や関係機関を代表し、次回の計画方針を申述べ、一層の協力を願つた。

#### 発生地域にみる原因

3年前当時合併前の更級郡牧郷村芦沼(現大岡村)に岐阜県下より林1号苗を移入した。その苗の中にゴールが少々みえたということである。それで、そのゴールを採取焼却して植付けたい。

しかもその1年目にすでに発生し、急いで焼却したものであるが、もう手の施しようがない位に拡大してしまつた。これが第Ⅰ図にみられる一倉田と附近にまん延した200町の被害といえる。

次に米田和の境界線上にある被害地域も似たような経過でその周辺100町の被害面積となつた。

なお、6月11日には各関係技術者総動員で3班に分れて弘崎地区、中枝地区、牧田地区を調査した。その結果、吐唄、和田、中原の各地区で合計90町を発見した。これは調査に巡廻したのは路線のみであつたから、実際には計り知れないものがあるであろう。

6月17日前回の外輪を調査したところ、犀川をこえて日原地区日名、置原、蕨平で被害グリを発見した。これは分散しているので、その地域ごとに植えた苗木に原因があるものと推定された。

しかし、22日には津和地区、25日信級の柵の川地区で発見、信州新町全域の発生を確認した。

第2次調査の結果をもつて、町のクリタマバチ防除対策会議を役場にもち、20日関係者を招集し対策をねつた。

その結果新しい各地区に同様の防除組織をつくり対処することになり、時期は田植が終了する22日とした。

22日、午前7時弘崎地区では飯綱神社に集合、いよいよ山へ入つてみれば、前回の一倉田と地区と被害は変わらない。しかし、吐唄地区ではすでに成虫の発生したのも多く、和田地区に重点をおく。しかし、この地区として成虫発生は時間の問題なので、24日までの2日間とした。

牧田中、中牧、日原地区では成虫発生に報に効果半減を感じ、本年の駆除作業は中止した。

#### 駆除対策今後の方針

今回のクリタマバチ駆除を反省してみると、発見がおくれたため、効果を少くして残念であつた。

しかし、今後は一層強力な手段で防除につとめなければならない。

次にとるべき手段は天敵の放飼である。伐採できないものには天敵で追討をかけて完全防除の方法を講じてゆかなければならない。

また、抵抗性のある利平や銀寄等の接換によりクリタマバチに弱いシバグリを山林から一掃してしまうこともその手段であると思う。

町としても、他の地域の優良事例を参考に計画を進めている。

一般町民も単なる一時のクリタマバチ防除に終らず、この機会に一層生産的方向へ推進し、クリの一大産地をつくるように願つている。

(長水農業改良事務所犀峽地区普及所)

## 雑 録

### 犬飼哲夫博士欧洲へ出張さる

北大農学部教授犬飼哲夫博士は国際植物保護会議に出席のため日本学術会議の代表として3週間の予定で出張された。9月3日北極廻りで西独へ赴き、野鼠、野兎部門では座長として活動、9月24日無事帰朝された。

### 野生鳥獣審議会の設置

野生鳥獣の保護増殖および狩猟の適正化に関する重要事項を審議する目的で、野生鳥獣審議会が農林大臣の諮問に応ずる臨時機関として設けられて、6月7日閣議決定、7月3日付委員15名、幹事9名が関係各界から委嘱された。初の会合は7月9日、第2回8月20日、第3回9月27日と開催されている。

**編集後記** 前号から情報の活字を変更してみた。編集委員会でも、「読み易い」「活字が小さいのではないか」等いろいろな声が出ている。乗りかけた船というわけでもないが、12月まで続けてみることにしたので、読者の忌憚ない御批判をお願い申し上げます。(編集委員)